

インターネット依存尺度(IAT)の検討： 女子高校生を対象として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4858

インターネット依存尺度（IAT）の検討 －女子高校生を対象として－

川上 正浩

臨床心理学専攻教授

要約

本研究では Young (1998) のインターネット依存尺度（Internet Addiction Test: IAT）を日本の女子高校生 49 名を対象として実施し、因子分析を実施した。その結果，“囚われ”，“過剰使用”，“本業怠慢”，“気晴らし”，“ネット優先”の 5 因子が抽出された。同時に測定された個人特性とこれら 5 つの下位尺度得点との相関を検討したところ、セルフ・コントロール、学習意欲は本業怠慢と関連していることが示された。一方で、外的要因による行動のコントロールと囚われ、気晴らしとの間にも関連が示された。さらに Jung 心理学的タイプにおける外向一内向や、Big Five における協調性とネット優先との間に関連が認められた。

キーワード：インターネット依存、女子高校生、Internet Addiction Test

I 問題と目的

令和 2 年度の内閣府青少年のインターネット利用環境実態調査（内閣府、2021）によれば、高校生のインターネット利用率は、男子で 98.5%，女子で 99.3% であり、全体の 98.9% がインターネットを利用している。もっとも利用者の多い「スマートフォン」での利用内容を見てみると、高校生男子では、多い順にコミュニケーション（メール、メッセンジャー、ソーシャルメディアなど）が 91.5%，動画視聴が 89.1%，ゲームが 88.7% となっている。一方高校生女子では、コミュニケーションが 95.2%，動画視聴が 90.3%，音楽視聴が 87.1% である。こうしたインターネット利用の普及とともに、インターネットの過度な利用と、それに伴い生活や健康に支障をきたす、いわゆるインターネット依存と呼ばれる問題が指摘されるようになった。

Griffiths (2005) によれば、インターネット使用には、耐性 (tolerance)，重要視 (salience)，気分の変化 (mood modification)，引きこもり

(withdrawal)，葛藤 (conflict)，再発 (relapse) といった、薬物依存に近い次元 (dimension) が含まれており、インターネット依存は、薬物依存に近い特徴を示す。Young (1998) もこの点を指摘し、インターネット依存は社会的にも注目されている。日本においても、インターネット依存に関する研究は多く認められる（たとえば、藤井、2019；井上・小嶋、2018；稻垣ら、2017；片山・水野（松本）、2016；宮城ら、2020；澤井・福岡、2018；瀧、2016；田ノ上・田邊、2020；鄭・野島、2008）。

さらに Young (1998) は、こうしたインターネット依存の程度を測定するための 20 項目からなる Internet Addiction Test (IAT) を提案した（表 1）。IAT では、それぞれの項目に対し、たとえば、「睡眠時間をけずって、深夜までインターネットをする (Do you lose sleep due to late night log-ins?)」ことが、「全くない (1)」から「いつもある (5)」の 5 件法で回答を求めるにより、20 項目の合計点によって回答者のイン

表1 Young の IAT : Widyanto & McMurran (2004) の因子分析結果に基づく

	Original	日本語
Salience		
Do you choose to spend more time on-line over going out with others?		誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが
Do you snap, yell, or act annoyed if someone bothers you while you are on-line?		インターネットをしている最中に誰かに邪魔をされると、いらっしゃりたり、怒ったり、大声を出したりすることが
Do you fear that life without the Internet would be boring, empty and joyless?		インターネットの無い生活は、退屈でむなしく、つまらないものだろうと恐ろしく思うことが
Do you feel preoccupied with the Internet when off-line or fantasise about being on-line?		インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えたり、インターネットをしているところを空想したりすることが
Do you block disturbing thoughts about your life with soothing thoughts of the Internet?		日々の生活の心配事から心をそらすためにインターネットで心を静めることが
Excessive use		
Do you neglect household chores to spend more time on-line?		インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそかにすることが
Do you lose sleep due to late night log-ins?		睡眠時間をけずって、深夜までインターネットをすることが
Do you feel depressed, moody, or nervous when you are off-line, which goes away once you are back on-line?		インターネットをしていないと憂うつになったり、いらっしゃりたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが
Do you find that you stay on-line longer than you intended?		気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが
Do you try to hide how long you've been on-line?		インターネットをしていた時間の長さを隠そうすることが
Neglect work		
Does your work suffer (e.g. postponing things, not meeting deadlines, etc.) because of the amount of time you spend on-line?		インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことが
Does your job performance or productivity suffer because of the Internet?		インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが
Do you become defensive or secretive when anyone asks you what you do on-line?		人にインターネットで何をしているのか聞かれたとき防御的になったり、隠そうしたことが
Anticipation		
Do you find yourself anticipating when you go on-line again?		次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが
Do you check your e-mail before something else that you need to do?		他にやらなければならないことがあっても、まず先に電子メールをチェックすることが
Lack of control		
Do you try to cut down the amount of time you spend on-line and fail?		インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが
Do others in your life complain to you about the amount of time you spend on-line?		インターネットをしている時間が長いと周りの人から文句を言われたことが
Do you find yourself saying "Just a few more minutes" when on-line?		インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが
Neglect social life		
Do you form new relationships with fellow on-line users?		インターネットで新しい仲間を作ることが
Do you prefer excitement of the Internet to intimacy with your partner?		配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが

インターネット依存の程度を判定する。たとえば、この合計点が 70 点以上であれば、生活に重大な影響をもたらす高いインターネット依存であると判定される。このように、一般には一因子構造と捉えられ、使用されることの多い IAT であるが、多因子構造を指摘する研究もあり（たとえば川原, 2021）、岡安（2016）によれば、その因子構造は、文化的な背景や対象者の属性によって異なるとされている。

たとえば Widjyanto & McMurran (2004) は、Young (1998) の IAT20 項目を対象に調査を実施し、男女 86 名（男性 29 名、女性 57 名）のデータを用いて因子分析を行い、その結果、6 つの因子を抽出した。それらは、囚われ (Salience), 過剰使用 (Excessive use), 本業怠慢 (Neglect work), 心待ち (Anticipation), 統制欠如 (Lack of Control), 社会生活の無視 (Neglect Social Life) の 6 つである（表 1）。さらに、香港の大学生 410 名を対象に、データを収集し、因子分析を行なった Chan & Law (2008) は、引きこもりと社会的問題 (Withdrawal and Social Problems), 時間管理と本業 (Time Management and Performance), 現実逃避 (Reality Substitute) の 3 つの因子を抽出した。

また Widjyanto et al. (2010) は、心理的／情緒的葛藤 (Psychological/Emotional Conflict), 時間管理の問題 (Time–Management Problems), 気分変化 (Mood Modification) の 3 因子を抽出し、アメリカの大学生 215 名を対象にオンライン調査を実施した Jelenchick, et al. (2012) は、依存的使用 (Dependent Use) と過剰使用 (Excessive Use) の 2 因子を抽出した。さらに、異なる 4 種類のサンプルを使用した Pawlikowski et al. (2013) は、統制欠如／時間管理 (Loss of Control/Time Management), 囚われ／社会的問題 (Craving/Social Problem) の 2 因子を抽出している。レバノンの大学生 256 名を対象とした Samaha et al. (2018) は、統制欠如 (Lack of Control), 社会的な引きこもりと情緒的葛藤 (Social Withdrawal and Emotional Conflict),

時間管理の問題 (Time Management Problems), 問題行動の隠蔽 (Concealing Problematic Behavior) の 4 因子を抽出している。日本人大学生 299 名を対象とした Osada (2013) は、社会的相互作用の問題 (Social Interaction Problems), 仮想現実 (Virtual Reality), 強迫性と衝動性 (Obsession and Impulsion) の 3 因子解を報告している。また、同じく日本人大学生 711 名を対象にデータを収集し、因子分析を行なった川原 (2021) は、「コントロール喪失」と「執着と恥・苛立ち」の 2 因子構造を提案している。

これらの先行研究で示された因子構造の中心には、囚われの感覚や、時間管理等のコントロールが失われていること、本業や社会的な行動に差し障りが生じていることなどがあり、共通する部分も多い。しかし、先述のように文化的な背景や対象者の属性によって異なるとされるこの因子構造は流動的である。さらに、日本人を対象とした研究においては、その因子構造の検討はそれほど進んではいないと言える。また、そうした中で、多くの研究が大学生を対象とした尺度の検討を行っており（たとえば川原, 2021；Osada, 2013），高校生や中学生を対象とした研究はまだ少ないと言わざるを得ない。そこで、本研究では、高校生、特に、内閣府（2021）の調査においても、男子に比べて、よりインターネットの使用率の高いと考えられる高校生女子に焦点を当て、Young (1998) の IAT を実施し、改めて因子分析を行うことで、その因子構造を検討する。

高校生向けのインターネット依存尺度としては、鶴田ら（2014）が「高校生向けインターネット依存傾向測定尺度」を提案している。この尺度は、「精神的依存状態」「メール不安」「長時間利用」「ながら利用」「対面コミュニケーション不安」の 5 因子 39 項目からなる尺度である。そして、これら 39 項目の得点の合計をインターネット依存傾向の得点とし、これと Young (1996) の尺度との間に $r=.918$ の相関があることを報告している。一方で、鶴田ら（2014）のこの尺度は、2014 年当時の状況を反映して、高校生向けに特化する

ために、メールに焦点化した質問項目を含んでいい。しかしながら、現在では LINE, Twitter, Instagram, Facebook など、SNS の発展やその機能の多様化に伴い、あえてメールに特化することが適正な「インターネット依存」を測定できるのかについての疑問も残る。また、この尺度の項目数は Young (1998) の項目の倍近いもの（39項目）であり、実施における簡便さについては改善の余地もあると考えられる。

そこで本研究では、20項目からなる Young (1998) の尺度に立ち返り、この項目を改めて吟味することを目指す。さらに、依存傾向と関連すると考えられるセルフ・コントロール、高校生にとって本業と考えられる学習に対する意欲、さらには遅れに対する態度、そして、Big Five や Jung の心理学的タイプ論に基づくパーソナリティを同時に測定し、これらと IAT との関連を検討することで、因子構造に関する妥当性を吟味する。

II 方法

調査時期

調査は 2021 年 5 月から 11 月にかけて、3 回に分けた質問紙調査として実施された。

調査対象者

近畿圏の A 女子高校に所属する高校生 49 名（平均年齢 17.4 歳、 $SD=0.50$ ）が調査に参加した。

質問紙の構成

本研究で取り扱う質問紙は、①Young (1998) によって作成された Internet Addiction Test (IAT)、②杉若 (1995) の「日常的なセルフ・コントロール尺度」、③河村 (1999a, 1999b) のスクールモラール尺度のうち「学習意欲尺度」、④安藤・川上 (2006) の「遅れに対する態度尺度 (VODKA2005)」、⑤Jung の心理学的タイプの理論に基づき佐藤 (2005) が作成した「JPTS (Jung's psychological type scale)」、⑥小塩ら (2012) が作成した「TIPI-J (Ten Item Personality Inventory Japanese version)」の 6 つの尺度を含んでいた。

①Young (1998) によって作成された Internet

Addiction Test (IAT : 20 項目) については、「インターネット」に対する依存の程度を測定するための尺度である。「気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」のように、文の途中で止められた質問項目に対して、「全くない (1)」、「ときどきある (3)」、「いつもある (5)」の 5 件法で、普段の生活についての評定を求めるものであった。項目は一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

②杉若 (1995) の「日常的なセルフ・コントロール尺度」(20 項目) は、「問題解決方略や遅延に関する項目」が含まれる“改良型セルフ・コントロール”(8 項目)、「几帳面さ・計画性に関する項目」が含まれる“調整型セルフ・コントロール”(5 項目)、自己制御とは異なるレベルでの対処方略を含む“外的要因による行動のコントロール”(7 項目) の 3 因子から構成される。「ものごとに集中できないときには、集中する方法を見つける」(改良型セルフ・コントロール)、「憂うつなときには、楽しいことを考えるようしている」(調整型セルフ・コントロール)、「自分の悪い習慣をやめるには、外部からの手助けが必要である」(外的要因による行動のコントロール) などの項目に対して、「全くあてはまらない (1)」から「まさにあてはまる (6)」までの 6 件法で回答が求められた。項目は一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

③河村 (1999a, 1999b) による「学習意欲尺度」(4 項目) は、学校の勉強に意欲的に取り組んでいるかを測定する尺度であり、「学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる」などの 4 項目から構成される質問項目に、「全く当てはまらない (1)」、「どちらとも言えない (3)」、「とても当てはまる (5)」の 5 件法で、回答を求めるものであった。これら 4 項目は、以下に詳述する「遅れに対する態度尺度 (VODKA2005)」と併せて、一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

④安藤・川上 (2006) の「遅れに対する態度尺度 (VODKA2005)」(37 項目) は、自分の遅れ

に対して悪いと思う態度である“自分の遅れに対する罪悪感”(21項目), 他者の遅れを非難する“他者の遅れに対する非難”(12項目), 遅れ一般に対してその自己責任性を重視する態度である“遅れの自己責任性”(4項目)に対応する37項目に対して「全く当てはまらない(1)」「どちらとも言えない(3)」「とても当てはまる(5)」の5件法で回答が求められた。これら37項目は、上記の「学習意欲尺度」と併せて、一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

⑤JPTS (Jung's psychological type scale)は、佐藤(2005)が、Jungの心理学的タイプの理論に基づいて構成し、信頼性・妥当性の検討を行っている尺度である。Jungの心理学的タイプの理論に基づき、“外向一内向”(9項目), “思考一感情”(9項目), “感覚一直観”(9項目)という3つの因子から構成される。佐藤(2005)に倣い、「楽しみを内側の世界に求めるほうだ」(内向), 「楽しみを外側の世界に求めるほうだ」(外向), などの対極的な文が左右に配置され、どちらが自分により当てはまるかについて、「楽しみを内側の世界に求めるほうだ」(内向)に「まったく当てはまる(1)」から「楽しみを外側の世界に求めるほうだ」(外向)に「まったく当てはまる(7)」までの7件法で回答を求めるものであった。“外向一内向”については、得点が高いほど外向, “思考一感情”については得点が高いほど思考, “感覚一直観”については得点が高いほど感覚となる。項目は上記までとは異なる質問紙に、一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

⑥TIPI-Jは、小塩ら(2012)が作成した日本語版のBig Fiveの性格特性5つについて測定する尺度である。外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの下位尺度それぞれ2項目、合計10項目で測定される尺度であり、本研究では小塩他(2012)と同様に「全く違うと思う(1)」「おおよそ違うと思う(2)」「少し違うと思う(3)」「どちらでもない(4)」「少しそう思う(5)」「まあまあそう思う(6)」「強くそう思う(7)」

の7件法で評定が求められた。これらの項目は1項目ずつ、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の順に2回り配置され、上記2つとはさらに異なる質問紙中に提示され、評定が求められた。

手続き

大学教員が担当する、高校生向けの心理学系講義の講義時間中(2021年5月から2021年の11月の期間)に質問紙が3回の質問紙調査として配付され、調査対象者は集団で質問紙調査に参加した。調査対象者には個人ベースでこれらに回答することが求められた。

倫理的配慮

調査の実施に際しては、その結果が統計的に処理され、個人の結果が問題とされないこと、結果は研究の目的以外に使用されることなく、参加は自由意志によるものであり、いつでも質問への回答を辞められることをフェイスシートに記載し、周知した。これらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加することが求められた。

III 結果

インターネット依存尺度の因子分析

IAT20項目に対して、あらためて最小二乗法、Promax回転による因子分析を行った。因子の解釈可能性を判断し、5因子解が妥当と考え、項目や因子の解釈可能性や、どの因子にも因子負荷量が|.35|未満であることや、複数の因子に対して因子負荷量が|.35|以上であることを考慮して、項目の削除を行った上で因子分析を繰り返し、最終的に12項目からなる5因子解を採択した。この因子分析表を表2に示す。

第一因子は、「インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをしているところを空想したりすることが」、「次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが」の2項目に負荷量が高く、インターネットをしていない場面でインターネットに思いを馳せる傾向であり、「囚われ」と命名された。第二因子は、「インター

表2 インターネット依存尺度の因子分析表

項目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
囚われ ($\alpha = .886$, $M = 2.21$, $SD = 1.27$)						
インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをしているところを空想したりすることが	.928	.044	.026	-.006	-.001	.925
次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが	.834	-.086	-.046	.076	.058	.706
過剰使用 ($\alpha = .752$, $M = 3.66$, $SD = 1.02$)						
インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが	-.168	.951	.008	-.121	.175	.807
インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが	.223	.578	-.114	.167	-.101	.522
気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが	.117	.422	.280	.180	-.056	.550
本業怠慢 ($\alpha = .801$, $M = 2.63$, $SD = 1.02$)						
インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそかにすることが	-.217	-.098	.831	.245	-.063	.604
インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが	.193	-.075	.778	-.256	.199	.750
インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことが	.063	.166	.754	-.085	-.210	.681
気晴らし ($\alpha = .752$, $M = 2.52$, $SD = 1.23$)						
インターネットをしていないと憂うつになったり、いろいろしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが	-.090	.005	.094	.763	.161	.693
日々の生活の心配事から心をそらすためにインターネットで心を静めることが	.161	-.001	-.108	.721	-.058	.576
ネット優先 ($\alpha = .799$, $M = 2.21$, $SD = 1.04$)						
誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが	.013	.113	-.150	-.010	.883	.813
配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが	.094	-.045	.141	.274	.563	.669
	F1	F2	F3	F4	F5	
F1	—	.555	.431	.471	.497	
F2		—	.442	.366	.349	
F3			—	.208	.225	
F4				—	.464	

ネットをする時間を減らそうとしても、できないことが」、「インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが」、「気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」の3項目に負荷量が高く、インターネットをしている場面で過剰な時間、使用してしまう傾向であり、「過剰使用」と命名された。第三因子は、「インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそ

かにすることが」、「インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが」、「インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことが」の3項目に負荷量が高く、インターネットをしていることで、本業に支障が出る傾向であり、「本業怠慢」と命名された。第四因子は、「インターネットをしていないと憂うつになったり、いろいろしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」、「日々の生活

の心配事から心をそらすためにインターネットで心を静めることができ」の2項目に負荷量が高く、インターネットをすることで気晴らし (distraction) の効果が得られる傾向であり、「気晴らし」と命名された。第五因子は、「誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが」、「配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが」の2項目に負荷量が高く、インターネットを、対面での対人関係よりも優先する傾向であり、「ネット優先」と命名された。

信頼性検討のために、各因子が高い負荷を示した項目の得点について Cronbach の α 係数を算出したところ、表 2 に示したように、.752～.886 の値が得られた。各因子に負荷量の高い項目の平均値を個人ごとに算出し、これを個人の下位尺度得点とした。そのうえで、「囚われ」、「過剰使用」、「本業怠慢」、「気晴らし」、「ネット優先」の下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出し、これを表 2 に示した。

次に、インターネット依存尺度の下位尺度得点間相関を算出し、この結果を表 3 に示した。なお本研究では、相関係数の効果量については Cohen (1992) に倣い、 $|r|=.10$ を効果量小、 $|r|=.30$ を効果量中、 $|r|=.50$ を効果量大と判断した。「囚われ」は、「過剰使用」、「ネット優先」との間に効果量大の正の相関を、「本業怠慢」、「気晴らし」との間に効果量中の正の相関を示した。一方で「本業怠慢」は「囚われ」、「過剰使用」とは効果量中の正の相関を示したものの、「気晴らし」、

「ネット優先」とは有意な相関を示さなかった。このことから、本業の怠慢につながるような過剰なインターネットの使用は、気晴らしの効果を求めているわけではなく、さらに、対面での対人関係の代替としての使用というわけでもないことが示唆される。

関連尺度の尺度構成

続いて、個人特性を測定する日常的なセルフ・コントロール尺度、学習意欲尺度、遅れに対する態度尺度 (VODKA2005), JPTS, TIPI-J について、すべて先行研究に倣って（下位）尺度の構成を行った。JPTS 以外は、対応する項目に対する回答の平均値によって、JPTS については、それぞれ該当する 9 項目の合計点によって、尺度得点が算出された。これらの個人特性を測定する下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出し、これを表 4 に示した。

次に、IAT の下位尺度得点と個人特性の下位尺度得点との相関係数を算出した（表 5）。日常的なセルフ・コントロール尺度については、「改良型セルフ・コントロール」と「本業怠慢」の間に効果量中の負の相関、「外的要因による行動のコントロール」と、「囚われ」、「気晴らし」との間に効果量中の正の相関が認められた。学習意欲については、「本業怠慢」との間に効果量中の負の相関が認められた。すなわち、学習意欲が低いことと本業怠慢の傾向が強いとの間に関連が認められた。IAT のその他の下位尺度得点との間に有意な相関は認められなかった。VODKA2005

表 3 インターネット依存尺度の下位尺度間相関

	囚われ	過剰使用	本業怠慢	気晴らし	ネット優先
囚われ	—				
過剰使用	.539 **	—			
本業怠慢	.343 *	.391 **	—		
気晴らし	.462 **	.389 **	.141	—	
ネット優先	.535 **	.423 **	.182	.523 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表4 本研究で使用された個人特性下位尺度得点の平均値、標準偏差

		平均値	標準偏差
日常的な セルフ・コントロール	改良型セルフ・コントロール	3.66	0.81
セルフ・コントロール	外的要因による行動のコントロール	3.82	0.95
	調整型セルフ・コントロール	3.84	1.02
スクールモラール	学習意欲（河村、1999）	3.42	0.79
	自分の遅れに対する罪悪感	3.51	0.57
VODKA2005	他者の遅れに対する非難	3.07	0.43
	遅れの自己責任性	4.05	0.85
	外向-内向	27.33	10.61
JPTS	思考-感情	28.02	7.49
	感覚-直観	36.27	8.75
	外向性	3.86	1.35
TIPI-J	協調性	5.27	1.09
	勤勉性	3.38	1.47
	神経症傾向	4.54	1.11
	開放性	4.11	1.17

については、“自分の遅れに対する罪悪感”と“気晴らし”，“ネット優先”との間に有意な正の相関が認められた。JPTSについては、外向-内向と“ネット優先”との間に効果量中の負の相関が認められた。すなわち、外向であることと、ネットより、対面による対人関係を優先する傾向とが関連していることが示された。TIPI-Jについては、協調性と“ネット優先”との間、勤勉性と“本業怠慢”との間に効果量中の負の相関が認められた。すなわち、協調性が高いことと、ネットより、対面による対人関係を優先する傾向とが関連していること、勤勉性が低いことと、本業怠慢の傾向が強いことの間に関連が認められた。

IV 考察

本研究では、IATに対して、独自に因子分析を実施し、囚われ、過剰使用、本業怠慢、気晴ら

し、ネット優先の5つの下位尺度得点を算出した。このうち、過剰使用は、インターネットの使用的仕方に関するものであり、どの程度依存的な行動をとっているのかに関する尺度となる。囚われと本業怠慢、ネット優先は、インターネットに依存的になることで、どのような影響が出ているのかに関する尺度であり、日常的にインターネットのことを考えたり、本研究の調査対象者である女子高校生にとっての本業である勉学に遅れが出たり、あるいは、対人場面よりもインターネットを優先しているのかの尺度となる。そして気晴らしは、インターネット使用に対する認知に関するものであり、インターネット使用が気晴らしの効果をもたらすという認知に関わる尺度となる。これらの尺度得点と、個人特性との関連について、相関分析を行った結果、本業怠慢は改良型セルフ・コントロールと関連していることが示された。改良型

表 5 IAT の下位尺度得点と個人特性の下位尺度得点との相関係数

	囚われ	過剰使用	本業怠慢	気晴らし	ネット優先
改良型セルフ・コントロール	-.169	-.224	-.363 *	-.059	-.156
外的要因による行動のコントロール	.323 *	.281 †	.162	.366 *	.260 †
調整型セルフ・コントロール	-.225	-.156	-.164	-.266 +	-.133
学習意欲 (河村, 1999)	-.066	-.244 †	-.321 *	.178	-.032
自分の遅れに対する罪悪感	.217	.091	-.207	.322 *	.309 *
他者の遅れに対する非難	.000	.001	-.063	.025	.002
遅れの自己責任性	-.132	.167	.274 †	-.241 †	-.241 †
外向内向	-.264 †	-.232	.090	-.226	-.397 **
思考感情	-.063	-.120	-.055	-.102	.004
感覚直観	-.008	-.002	-.265 †	.075	-.045
外向性	-.012	-.154	.063	-.214	-.284 †
協調性	-.032	-.167	-.072	-.145	-.395 **
勤勉性	-.016	-.091	-.360 *	.048	.070
神経症傾向	.263 †	.159	.112	.214	.150
開放性	.030	-.276 †	.107	-.073	-.077

** p < .01, * p < .05, † p < .10

セルフ・コントロールは「習慣的な行動を新しくてより望ましい行動へと変容していくためのセルフ・コントロール」(杉若, 1995) であり、自発的なセルフ・コントロールである。したがって、インターネット使用に際しても、それが本業の妨げとならないように使用するには、自発的なセルフ・コントロールが必要であることが示唆される。一方で、囚われ、気晴らしは、外的要因による行動のコントロールと関連が示された。外的要因による行動のコントロールは「他者依存の傾向や自発的な行動に対する消極性」(杉若, 1995) であり、インターネットに対する囚われから脱するためには、自発的な行動が必要であることが示唆される。さらに気晴らしとの関連からは、他者依存的な傾向が、インターネット使用によって気晴らしの効果があるという認知やそこに気晴らしを求

める傾向と関連していることを示唆する。

VODKA2005 については、自分の遅れに対する罪悪感と気晴らし、ネット優先との間に有意な正の相関が認められた。これらの関連については、現状では解釈可能性が低く、今後の検討が必要である。

また、本業怠慢と学習意欲との間に関連が認められたことは、学習意欲が低ければ、本研究の対象者である高校生にとっての本業である勉強を怠慢しがちになることを示し、概ね妥当な結果であると言える。

JPTS における外向一内向や、TIPI-J における協調性とネット優先との間に関連が認められたことは、対面での対人関係を優先することと外向あるいは協調性とが関連することを示しており、概ね妥当な関連であると解釈できる。同様に

TIPI-Jにおける勤勉性と本業怠慢との間に関連が認められたことも、妥当な関連であると言える。八木（2017）は、IAT20項目の得点により、大学生の調査対象者を、低群、中群、高群の3群に分け、群間にBig Five（村上・村上、2001）の得点差が認められるかを検討している。その結果、協調性、勤勉性に関して、本研究の結果と整合的な傾向が認められた。一方で八木（2017）においては、外向性、神経症傾向（情緒安定性）においても有意差が認められているが、本研究においては、5%水準では検証することができなかった。また本研究において認められる相関が、下位尺度によって異なることから、八木（2017）の得た結果について、更に詳細に検討することが可能となつたことを示唆していると考えられる。

以上のように、本研究においては、Young（1998）の尺度が改めて因子分析され、どの程度依存的な行動をとっているのか、依存的になることで、どのような影響が出ているのか、またインターネット使用に対してどのように認知しているのかに関わる5つの因子が抽出された。これらと個人特性との関連は概ね妥当なものであった。しかしながら、本研究は、女子高校生49名のみのデータに基づくものであること、また、遅れに対する態度については、明確な解釈ができていないことが本研究の限界点である。今後、データ数を増やす、対象年齢を広げるなどしていきながら、インターネット依存傾向について、より詳細に検討していくことが必要である。

文献

- 安藤史高・川上正浩（2006）。期限付き課題の遂行について（12）－VODKA2005作成の試み（1）。東海心理学会第55回大会発表論文集、49。
- Chang, M. K., & Law, S. P. M. (2008). Factor structure for Young's Internet Addiction Test: A confirmatory study. *Computers in human behavior*, 24, 2597–2619.
- Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, 112, 155–159.
- 藤井壽夫（2019）。本学学生におけるネット依存傾向と愛着スタイルとの関連について. 函館短期大学紀要, 46, 23–32.
- Griffiths, M. (2005). A 'components' model of addiction within a biopsychosocial framework. *Journal of Substance use*, 10, 191–197.
- 稻垣俊介・和田裕一・堀田龍也（2017）。高校生におけるインターネット依存傾向と学校生活スキルの関連性とその性差. 日本教育工学会論文誌, 40(Suppl.), 109–112.
- 井上拓哉・小嶋秀幹（2018）。保健福祉系大学生のインターネット依存傾向と精神的健康の関連. 福岡県立大学心理臨床研究：福岡県立大学心理教育相談室紀要, 10, 15–18.
- Jelenchick, L. A., Becker, T., & Moreno, M. A. (2012). Assessing the psychometric properties of the Internet Addiction Test (IAT) in US college students. *Psychiatry research*, 196, 296–301.
- Jung, C. G. (1921). Psychologische Typen. Zürich: Rascher Verlag. ユング, C. G. 林道義(訳) (1987)：タイプ論 みすず書房
- 片山友子・水野(松本)由子(2016)。大学生のインターネット依存傾向と健康度および生活習慣との関連性. 総合健診, 43, 657–664.
- 川原正人（2021）。ネット依存尺度の因子構造に関する検討. 東京未来大学研究紀要, 15, 25–34.
- 河村茂雄（1999a）。楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U(中学校用)実施・解釈ハンドブック. 図書文化。
- 河村茂雄（1999b）。生徒の援助ニーズを把握するための尺度の活用(高校生用). 岩手大学教育学部研究年報, 59, 101–108.
- 宮城妃菜・網内詩帆・萩彩乃・高木ルリ子・花田裕子・永江誠治（2020）。看護大学生におけるインターネット依存傾向とインターネット利用状況との関連. 保健学研究, 33, 35–45.
- 村上宣寛・村上千恵子（2001）。主要5因子性格検査ハンドブック－性格測定の基礎から主要5

- 因子の世界へ. 学芸図書.
- 内閣府 (2021). 令和2年度青少年のインターネット利用環境実態調査 Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/r02/net-jittai/pdf-index.html> (2022年2月11日)
- 岡安孝弘 (2016). インターネット依存の心理社会的影響およびリスク要因に関する研究の動向. 明治大学心理社会学研究, 11, 23–45.
- Osada, H. (2013). Internet addiction in Japanese college students: Is Japanese version of Internet Addiction Test (JIAT) useful as a screening tool. 専修人間科学論集心理学篇, 3, 71–80.
- 小塙真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み. パーソナリティ研究, 21, 40–52.
- Pawlakowski, M., Altstötter-Gleich, C., & Brand, M. (2013). Validation and psychometric properties of a short version of Young's Internet Addiction Test. *Computers in Human Behavior*, 29, 1212–1223.
- Samaha, A. A., Fawaz, M., Yahfoufi, N. E., Gebbawi, M., Abdallah, H., Baydoun, S. A., Ghaddar, A., & Eid, A. H. (2018). Assessing the Psychometric Properties of the Internet Addiction Test (IAT) Among Lebanese College Students. *Frontiers in Public Health*, 17, 1–7.
- 佐藤淳一 (2005). Jung の心理学的タイプ測定尺度 (JPTS) の作成. 心理学研究, 76, 203–210.
- 澤井智哉・福岡欣治 (2018). 大学生のインターネット利用動機とインターネット依存傾向の関係. 川崎医療福祉学会誌, 28, 77–87.
- 杉若弘子 (1995). 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究. 心理学研究, 66, 169–175.
- 瀧一世 (2013). インターネット依存とその測定について～インターネット依存傾向尺度作成の試み～. 奈良大学大学院研究年報, 18, 83–91.
- 田ノ上実沙・田邊敏明 (2020). インターネット依存傾向における使用目的と日常生活スキルとの関連性. 山口大学教育学部研究論叢, 69, 21–28.
- 鶴田利郎・山本裕子・野嶋栄一郎 (2014). 高校生向けインターネット依存傾向測定尺度の開発. 日本教育工学会論文誌, 37, 491–504.
- Widyanto, L., & McMurran, M. (2004). The psychometric properties of the internet addiction test. *Cyberpsychology & Behavior*, 7, 443–450.
- Widyanto, L., Griffiths, M. D., & Brunsden, V. (2011). A psychometric comparison of the Internet Addiction Test, the Internet-Related Problem Scale, and self-diagnosis. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 14, 141–149.
- 八木成和 (2017). 大学生のインターネット依存と性格特性との関連について. 四天王寺大学紀要, 64, 73–82.
- Young, K. S. (1996, August). *Internet addiction: The emergence of a new clinical disorder*. Paper presented at the 104th Annual Meeting of the American Psychological Association, Toronto, Ontario, Canada.
- Young, K. S. (1998). *Caught in the Net: How to recognize the signs of Internet addiction and a winning strategy for recovery*. New York: John Wiley.
- Young, K. S. (2004). Internet addiction: A new clinical phenomenon and its consequences. *American Behavioral Scientist*, 48, 402–415.
- 鄭艷花・野島一彦 (2008). 大学生の〈インターネット依存傾向プロセス〉と〈インターネット依存傾向自覚〉に関する実証的研究. 九州大学心理学研究, 9, 111–117.